文明開化

坤

文明并化初編下巻

○神は鶯蒙すべき道理

并僧ぜる人の心は穿の并

神は鶯蒙すべきものといふるは、三年の小児も知つて居るなり、分照に説ひいでもよい

拓なりのじやが、こち鶯敬する人の心は穿が十人が九人とは、大きな鶯連ふて居るなり、今日文明開化にはしむやうまと黒へば、一ト通り語りなれば

岡本茂
[illegible]

あらぬしドや、掛ちん、抱きゝ、さまぐ、まゝ、の
あるすで、分けていへば、俗人さへ、あれば、掛て居
てもも食持ものあり、出世も出来るやうにおかゝて
居る人、又俗人はせいでも、正直にさへして居れば、
外はまゝ下さるものとおもふて居る人、又つゝい
雑義なるすをも幸抱きほど、彩を叶はぬと思ふ
て、あら紆などある人、寒中にそぐの氣りある人、そぐし
氣りある人、病室に菓ものまゝで、お札をうけてあん

で有る人が、くるがまゐりて助けてくれと、白髪なの老翁が杖ごそごそ
ともて、きまつふ
ゐて、色蒼ざめて、手
ぐんぜ
服まなる
ぶるせもぐ
ぶるうして、我が信ぜん
ぶ
ぐ
ぶ
ぐ
ぶ
ぐ

といふものゝ信心の信りて種々あれども、其実は信
ぜる人といへども、皆家神の実を知らずして、虚に
ましるものが多い、抑我が神国の神の道といふは、
この佛名の説く和なども、大きな速ひで、求め従
ひず、天然に如きもので、実に学ぶ道といふは、我が
神の道でムる、早竟幸悟の説などを喝ふるは、
高神神道などゝ名づけて、佛法と云はせまして、
佛名の説うり起つてるので、神は幸悟なるす

刹那(せつな)ごとで、仏名の称(せう)名(みやう)ばかりを、二(ふた)声(こゑ)三(みこゑ)声(こゑ)人のふ所(ところ)と云(い)ふものゝ中(うち)や、仏(ほとけ)の誓(ちかひ)願(ぐわん)を、しんじ奉(たてまつ)ると云(い)ふ者(もの)や、ふ思議(しぎ)あるべからずや、ふ思議(しぎ)あるべからずや、ふ思議(しぎ)あるべからずやと、重(かさ)ねて、讃(ほめ)歎(たん)し給(たま)ふのである。

又(また)、善導(ぜんどう)和尚(をしやう)の観経(くわんぎやう)の疏(しよ)の玄義分(げんぎぶん)に、

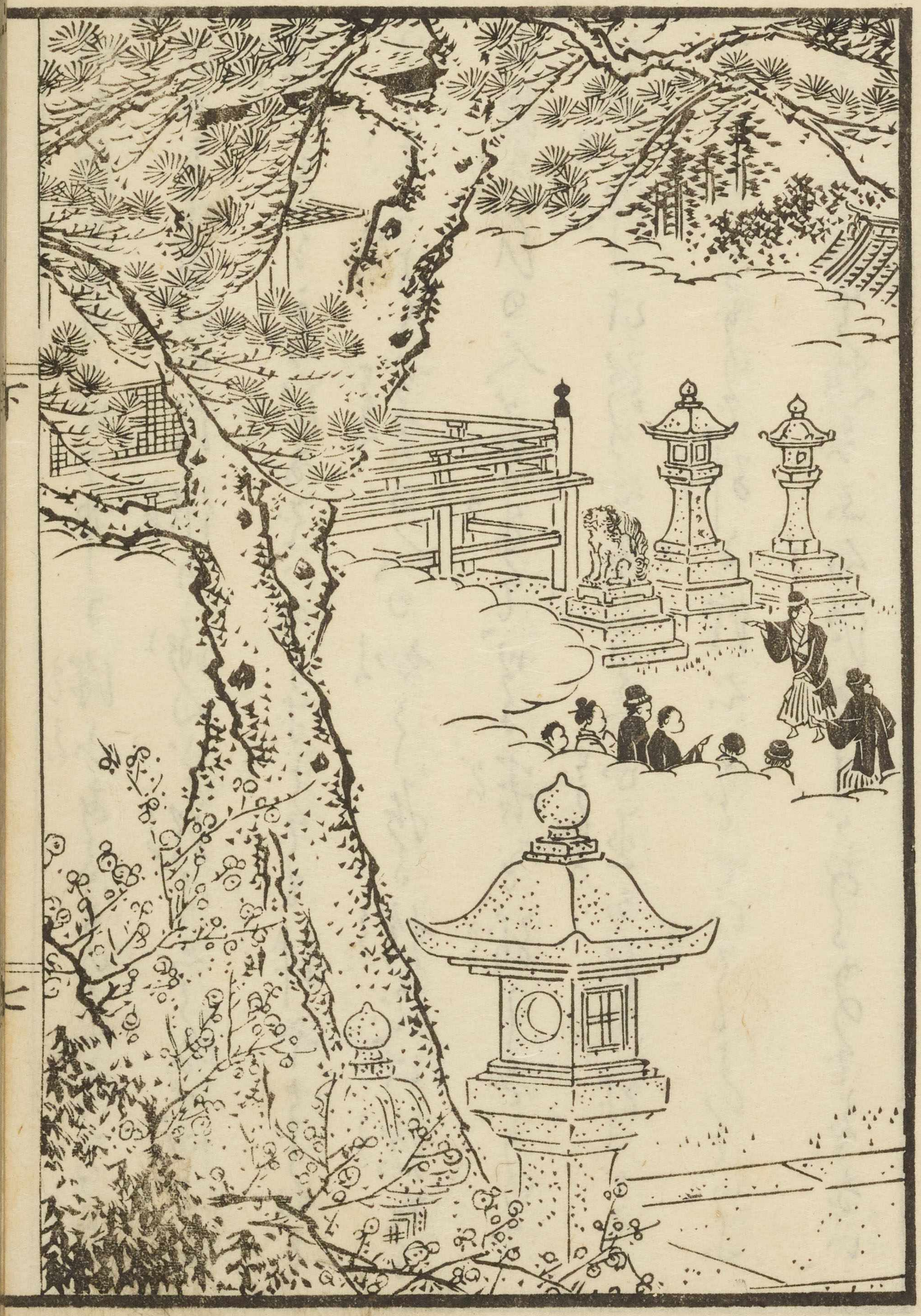
一(いち)心(しん)に専(もつぱら)弥陀(みだ)の名号(みやうがう)を念(ねん)じて、行住坐臥(ぎやうぢうざが)に、時(とき)の久近(くごん)を問(と)はず、念念(ねんねん)に捨(すて)ざるを、是(これ)を正定(しやうぢやう)の業(ごふ)と名(なづ)く、彼(かの)の仏願(ぶつぐわん)に順(じゆん)ずるが故(ゆゑ)なり。

と、釈(しやく)し給(たま)ふ。

此(この)文(もん)の意(こゝろ)は、一心(いつし

母方の祖父母を、外祖父母と称するも我国の人々は普く外祖父母と称し、我国の人々は普く外祖父母と称し、外祖父母の子孫を、外孫と称するも我国の人々は普く外孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従兄弟姉妹と称するも我国の人々は普く従兄弟姉妹と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従甥姪と称するも我国の人々は普く従甥姪と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従曾孫と称するも我国の人々は普く従曾孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従玄孫と称するも我国の人々は普く従玄孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従来孫と称するも我国の人々は普く従来孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従昆孫と称するも我国の人々は普く従昆孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従仍孫と称するも我国の人々は普く従仍孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従雲孫と称するも我国の人々は普く従雲孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従礒孫と称するも我国の人々は普く従礒孫と称し、又祖父母の兄弟姉妹の子孫を、従孫と称するも我国の人々は普く従


敬神愛国



此の事のものが世の中に深山あるものでしまつ
ひのもとそいつ諸の諸の諸んど諸の志あるが心ぐる
諸の諸のなるひなぐいのしぼとても神やまんと
りゆうが、よく世の人の知らぬ諸で、此諸なる
ん諸ひの人が世にて、世に害を神しともので
ある、一体此諸の心そんさ正直なれば、神が当
りてくれるもので、別に諸んなどせいでもよいといふ
言しやが、其様なふんぬなるものがあるものでそない、

して蒼(あく)紛(ぎょう)しことて、何の役(ゆ)にもたつものであらうぞ、
尤も力を淨(きよ)むる為に水をあらうた、神の心にも
叶ふまで合るが、其外佛名の説(せつ)にをいてもた、神
に當(とい)してた、然(さう)してせぬがよ終しいてもでムる、勿論(かんかん)
佛(ぶつ)説(せつ)も一家(いつか)の説(せつ)で、愚(ぐ)民(えん)を諭(さと)すまた、ほうい教(をしへ)
でもムらぬ、佛(ぶつ)法(ぎう)じやとて只(ひとすら)第(い)に、悪(きう)を婦(きう)に
淨(ひけ)でもムらぬが、佛法の師(しけ)家とある為に紛(おこな)に
法を、今(ぎ)我(あり)にいの、出世ぐのしたいのといふ、新(ぬが)れの

為に行ふことゝ、前が連ふるまで、驚くぞ海やへ鉾罵りひこ
引く拵なもので、何の詮もないすじやに依て、せぬが
よいとゝ申すので公る、又病氣に茶も飲まいで、お札を
張て居んで居る人も一向ありしぬるまで、病氣に茶を
飲むを、服の減と時に飯を喰ひ、渇いて時に水を飲む
と同じ事で、我が体の氣血の足りふ足やなどを、
抜け補ふ為まで、其的當の茶を飲まるぞあらぬます
で公る、丈を丈ざけの心配手當もせず、只神に頼んで

徳は大切なるべしやは徳を、心に違ひのない様にすべきなるべしと、又雲が薄ひ下りて、お札が深く、衣冠正しい人が助けてくれて、白髪の老翁が薄んでくれて、夢中に授りつゝあるべし、青燈あるをいふ人を、多くは我が信ぜる神を、人も信心させんと思ふて、実ぐるは見るも生ずるもせぬるを、見ゆるして様にいふので、是も佛名の此喩の説なぞ、青燈なるの説てあるのから、稱りていふるまで、神ならそのの

括な悟しいまを変してないまでムる、むだ出ふも、
佛説をいまのせてあるまもあるが、まを紹法
の行ハ見る世ま、この比喩の説を習つて、せるものなど
もあるまで、そんな法で、所捨して見るのでなくあるで
ムる、元来神ませよ、佛ませよ、そこへ解を
解りて、指図ある者なり、天地の理上を
於て、楽しくないまでムる、遠寒を我身を見ると
まじめといふて、不悔して、信心などある人があるが、

まれあまり後人は瀬(うた)て、ちと言まづる速(ちが)ふて拵なりの、
其ハ以くと思ぐ、椶櫚(しゅろ)箒(ほうき)も罷(おふ)に見え、洗濯(せんたく)物(ゆう)も幽(ゆう)
(れい)異(ひ)に見せる拵なもので、我人の逆(まよ)ひうち周まれる
で、其拵な咄(ちな)しある人を、拵(き)ハあて悪(ぢう)うな物じや、併(しい)し
ぐどん悪紙(ぐどん)なぐらも、弁を覚(そん)ある(けい)人のあるを、なまれ刻(しい)りの
ぎらかん暴論(ぎらかん)家よりをましぢや、一体悪(ぢう)うなものを論(まと)むまして、
きゝ悪(きゝ)なものなどを説(とい)て、覚(ぢう)うして等(こうび)くのもをうち
して、寛理(きうり)の周の再(せいよう)洋でもらも、人の恕(ぢん)会(へび)が悟(ぢ)な

あつたのあんのといふ、佛名のよくいふ括な咄しなどのある
るすもある、敬こそこのたれ、弟蘇宗といふ宗なるも立
て居たく、信心者を我が周で佛を信ぜる人よりも
禮周じやとふかく聲聞なるすなどを説かれたく、
さて人を、何の舞縁でしなり思さ有るので、其所罪
化の人とはいはれぬ、何るすもせよ、我々は法人せぬるす
を、よくしく手理を推寵めて、なる縁を括あるべきを
其理じやと、こゞのうち弁別がついてこのうち、信ぜんべき

○世に青膠のものは其外してあるまじき物理
世に青膠のものは其外してあるまじきは此理
なるとだらりいふこのことでは、何故ないと定めらるものといふ
為理が、命法をしれまいとなもふて、膠のもの
の、其のしてないを理を説をまず、其無長が思ふぬ者、一も
いうしいふが有ふる、意思ある所問へし下さまし、元
世界の中にあるとあらゆるもの、皆情非情をいはず、皆
夫々の為理のあるもので、道理にはづれたものの中にして

なりすべきは筈がない、世の諺に、理外の理といふものをいふ
が、あれは寇理のことぬ人のいひ出したまで、理外の理
といふものあるべきに、理がない、夫れ我があり、けの智
恵に、分別のつゐすると、理外の理などぬけ出しを
いふもので、今一ツ理の寇めやうが足らぬ者のことぬ
のじや、聖人は、陰火狐火などいふて、人のあれぞかるもの
も、ホスホルの光りじやといふす、是は刊行の、天寶
地矣といふ書、其外さまぐの寇理書に、説てある

もと、加(たと)へ
ぐえ
悪(あく)戯(ふざけ)
り
取(とり)もち
動(うごき)
ものも、
ーぎ
ありと
ーぎ
ので、
ーぎ
ーぎ
ーぎ

儀とせずもあるものじやなく、手ゝ拾なるものあつて
時々、まゝ理合をよく考て、なる程此理で所うじや
といふるを寛めて置けば、後合新物者説といふ
ども、婦孺子の咄しは此ゝ拾なく、だらくしいるものをいふ
ぬなく、人は知れ識らるゝ拾なるものをない、寓ふ思
儀といふ事、却て今は事のよくあるもので、第一
ぬ何して我方が語て居るの、ぬ何して口は味ひ
がつゝのるか、ぬ何して同に拾ゝのつゝのるか、ぬ何して

よく人の申しよ、或る山寺に、和尚と小僧と二人ゐて、或る時和尚が云のふ、此後は、毎日毎日、其日其日の事を、一つ宛書置をせよ、跡で見るがよいと云ふ、小僧心得ましたと云ふて、其日より、毎日毎日の事を書置をするが、或る日和尚が、小僧に向ひ、今日は何を書たと問ふに、小僧答へて、今日は和尚様が、大変に御腹を立てござりまして、茶碗を二つ御打割なされましたと書ましたと云ふ、和尚聞て、夫は大きに悪い事を書た、夫は書てはならぬ、外の事を書よと云ふ、小僧又其

でれなれ、まふより さういふ獣などや、深山幽谷大洋
などまれ、稀々のものが生じて居るもので、早見人の
見め及ぶぬ所在、人の国にうらぬ是のもので、怪物と
いふものでしれない、西洋の鳥獣魚鼈などを飛めて
書まれ、つひに見ものもせぬ異物なものがある、それ
なものが今家へ出てうら、やはり化物にしてしまふであらう、
稀まれ、それ書にも載せてない獣などの、出まいともいはれ
ぬものじやが、史にして怪しむべきものでもムらぬ、

○狐狸を化るものは非る道理

狐さめさむじな猫などが、狸なものは鬢を変じて、人を謝うまといふすれ、古来人のいふすで、別して狐を、化けるものは狸なるものは狸で、漢土の也藉ともおとぐしく也てあり、詩文章もいふてあり、作り物語などが、三国妖物傳などいふものが、三条の小児ともいふて、猫は世にふるまり、戯書の書は勿論、意もなる狸なる也物なも、ふ品織なるすを説く時は、いつでも

狐が引(ひき)合(あい)になるので、狐の分(ぶん)を取(とり)て逃(にげ)る方(ほう)なり、狐(きつね)ばかり人(ひと)を化(ばか)すものと、思(おも)ふは誤(あやまり)なり、狸(たぬき)も化(ばか)すものなり、其(その)昔(むかし)、世(よ)の中(なか)の人(ひと)が一統(いっとう)に狐(きつね)狸(たぬき)を、悪(にく)く思(おも)ひて居(をり)たる時(とき)、或(ある)人(ひと)の家(いえ)へ、狸(たぬき)が来(きた)りて、其(その)家(いえ)の主人(しゅじん)に、化(ばか)されまいぞと、言(いひ)ながら、其(その)人(ひと)の居(をら)ぬ間(ま)に、其(その)人(ひと)の姿(すがた)に化(ばけ)て、其(その)家(いえ)の者(もの)を、だまして金(かね)を取(とり)、逃(にげ)て行(いき)たる事(こと)、度々(たびたび)ありしかば、其(その)人(ひと)の帰(かへ)りの遅(おそ)きを、待(まち)かねて、女房(にょうぼう)が、夫(おっと)の姿(すがた)に化(ばけ)たる狸(たぬき)に、だまされまいぞと、言(いひ)ながら、夫(おっ

まで到(いた)るもの、俗(ぞく)に、物数寄(ものずき)といふ。

俗(ぞく)に、物数寄(ものずき)といふ。

おほひなる勘違(かんちが)ひ。

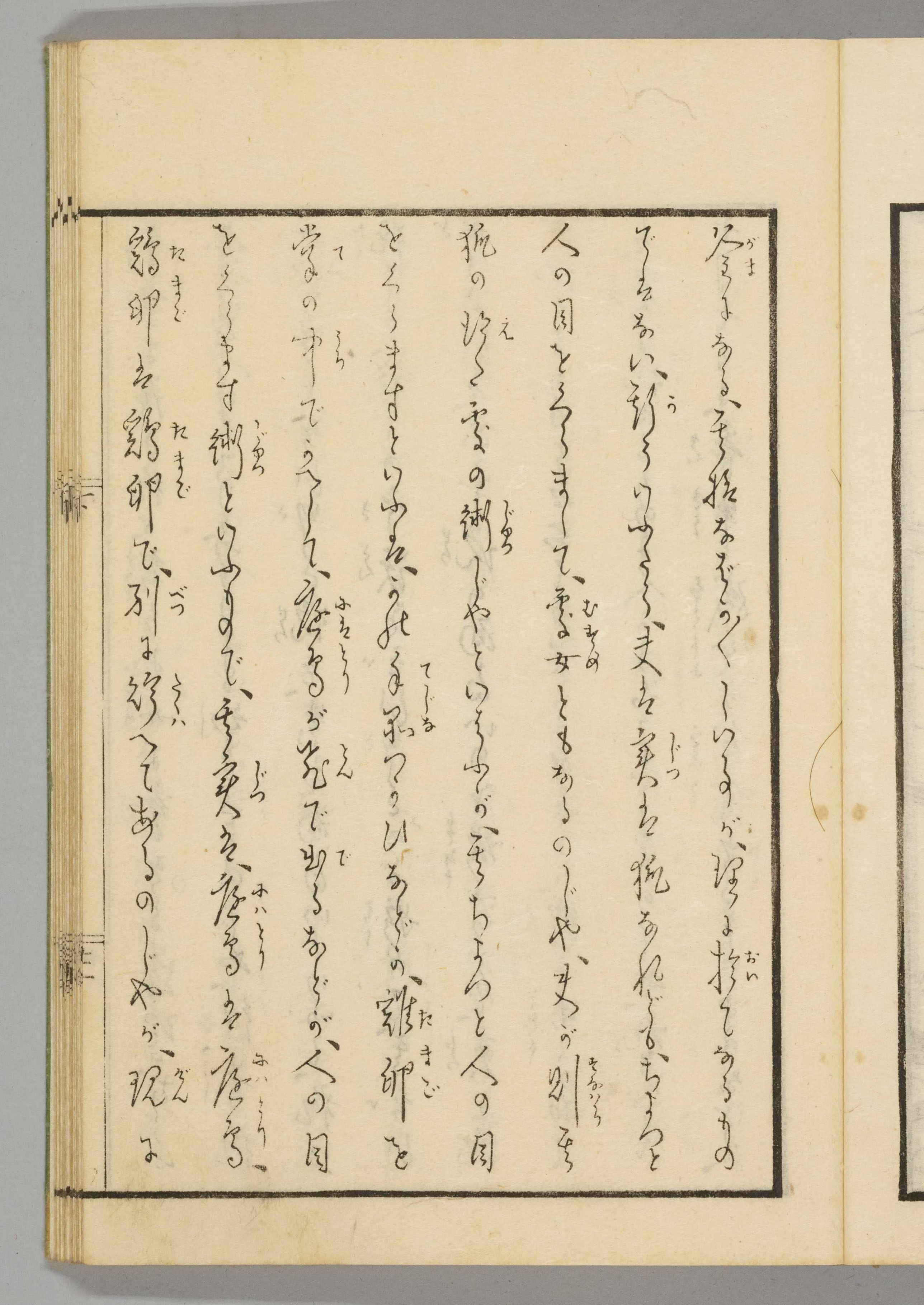
うつくしき人の、うつくしきを、物(もの)きらふ。

あまた人の招(まね)き、性(せい)つきなどがあるを、物(もの)きらひて、物(もの)を託(たく)して、物(もの)を隔(へだ)てなどするを、又(また)、海(うみ)を故(こと)とするを、物(もの)白(じろ)き海(うみ)ぎはなどを、物(もの)きらひて、又(また)、山(やま)を故(こと)とするを、物(もの)白(じろ)き山(やま)ぎはなどを、物(もの)きらひて、物(もの)を隔(へだ)てなどするを、物(もの)白(じろ)き海(うみ)ぎはなどを、物(もの)きらひて、物(もの)を隔(へだ)てなど





和得化生といふものを、鬱んだ、がうふりが蚊まゐ、地虫が蝶まゐ、毛虫が蝶まゐ、鬱んだ、毛が則化るのじやが、化けたり化けたりで、蝶まゐ毛虫が、又もとの毛虫になるものの出来ぬのが、天然あるべきまゐりの理じや、細しまゐ彼の狐の化るといふ者を指でもなくて、現にそこなるに居る狐が、十六七の娘になり、又其ぢきにもとの狐になる、今此家にもなる茶釜がつひちよつと狸になり、又もとの茶



冬(がま)になる、天指なぞのくしいるすが、理は拵(おい)しなるもの
ではない、新(う)らいふくら、夫は実(じつ)は猫なれども、ちよつと
人の目をくらましてて、雲女(むまめ)ともなるのじや、夫が則(さなから)
猫の姿(え)の雲の御(ぢ)じやといふ事が、天ちよつと人の目
をくらますといふは、これ手(てじな)和つりひなどの、雞卵(たまご)を
掌(て)の中(うち)でうへして、産(ふ)ゐるが先(ゑ)で出(で)るなどが、人の目
をくらます御(ぢ)といふもので、天実(じつ)は、産(ふ)ゐる産(ふ)ゐ
鶏卵(たまご)は鶏卵(たまご)で、別(べつ)は絵(えゑ)へてあるのじやが、現(ぞん)は

そこに居る狐が、忽らおひ出に、変ぎる道理があるふ
ものあるまいるものかつりまも知れたものじや、結昔狐
が化をるとそひ出して説を、見た面白いとりふて、狐は
託して稱ゝの事訣をそひ出しこのが始めで、事云ひ
出して説を、其事説の面白いのを聯ぶのうで、実は狐
の化をるものとはしれんぐでありうが、殺は来ると知て
た、実は化をるものは人、うつしたまふこのじや、殺んぐ
七月七日は、牽牛織女が會合あるとりふるなども、

矣名うらひ付いて、附會の説を立るので、俗
人は丈でもよいが、父人が丈を願ひものにして、胸をい
父あるを化るなり、然れ附會の説をも、人が信ずる
様になるは、誅に至るいるまで、毛流義がはずへも移つて、
賛扑なる日本人が嘘つきの仲間入りしたは、苦しい
ことで、丈はいつても必ずしぬるものなり、せめて今のうち
父明異化の人にあて、猟の紀なる説などは、看破
せるのだからぬるまでゝ、新しいこともまだ或ひの

翁(と)けぬ人を、理(り)屈(くつ)をなる程なそても居るが、現(ぞん)生(さい)紀(ぞ)
うさわる人があるが、あれをどふいふものじやといふやる
であらうが、其御(ぞ)のさわるといふのが大事(まちが)違ひで、心の定(さだ)
まらぬ人が、聖(のうら)道なぞを歩(あるい)行て目が覚(く)れでも起きと、
家(こ)らに狐でも居をせまいかと思ふ事、我からぞつきして、
毛(けある)穴のような様なをなるとも、其や心が類(そんぞふ)例して、其を踏(かた)
違(ちが)へたり、塩(うきね)根(つき)へ寄(あと)ゆつたりして、事(じが)らで化のさわる
事のなりて志まふのじやも、其も家(うち)へ帰(かど)つて、隠(かく)してでも

居ぬまでよりは、喋(ふ)くと咄(ぐな)して、おまけは出もせぬ猫を出して
猪をいふとり、さまぐ尾(と)は尾(と)を付(つ)けて咄あるに、人も言(まこと)
と思ふて、何(なにぐ)来る猫は御(だ)くさくさくなし、風(ふう)呂(や)屋でも
いひ床(とこや)屋でもいふ我が思(おら)のを引(ひき)札(ふだ)して弘(ひら)める猪な
もので、誰は幸(き)の毒(せんだん)多(ぞ)なるものじや、まぐつのしぬるも
がある、或(あ)る時、人が行ものは出屋(あ)ふことりは咄しをして示が、
傍(そだ)は居て人が、大きはあざつらふて、多(ぞ)庚(ぐ)なるものをいふ
人ぐや、今(いまどき)時昔(むかしざまし)噺はあるに猪な、此ものがいるまぐいふ

るすがあるものか、史を大なる狐か狸のまぎであるふといふ
と、此括なまつらぬるすをない、此人をお蕉（きうせう）に交（かんじ）を讀（よ）む、
ちよつと理（りく）屈もいふ人じやに依て、ましがきな人に寄（こい）して、
化あを出ぬものと寃（きう）理（り）しと猩ならぬ、狐狸を化る
ものと搦（きめ）るまは、性（おしう）な猩（せう）搦（て）のあるすぐふらうと聞（と）ふこと、
否（いや）別（べつ）に寃（きう）理（り）も跛（いこ）さぬが、狐狸をお末（こらい）ふ化る
ものといふてあるなし、化ると云ふて居るのじやといふて、
赤（せきめん）面の体（てい）じやに依て、押（おし）ても拝（とが）めなんぞが、お末（こらい）

うら化るものと人がいふことで、其人の口について、化る物
と云ふ種ならば、同お今見て来るといふ人を、あざける
の見識なない筈で、元来いふことが能所焼尾といふ
ものでとんとまとまらぬ、併し此人は限らず、此括な博もない
いふ人が世ゆるは浮山あるものじや、早竟我が見当て
もなく人の論や説を受け次ましていふ人は悲め
れて、一句も出ぬ括なるすが出来るのじや、扨こぬきや
しかも人は姿を見せぬ括はするものあ、猶の仲間人

入まられたのでゝ、猶ほ人は蓄かるものでゝ、別に奇怪な
説をこしれさうなるものもないが、こゝやこそ毛を逆さ
に拵ると、火のある性がある故、紀け伸ぶるに入まられ
たるものと見えたる、金体を訳なれば、魚の鱗や杤に
も、紀け伸ぶるに入まれて能さうなものでゝ、ふるが入まられ
なんぞ、金くをのしこのないなれば、ふらう、仕合せなるもの
でゝある、

○功業もなし人と猶ほ弟に知るまじき道理

瓶を化るゝるい獣として悪むかと思へば、又神に祭つて
尊敬する人がある、是もだかくしいるまで、是迄、瓶を
稲荷大明神のつのもしめといふてすゝらの言迷ひで、
瓶の穴でもあると、羽を建て、稲荷大明神にして
志まひ、瓶をぶち殺して山まりを忘れて、稲荷大
明神に志てしまふ、事しきに到つて、何稲荷の
お子が何稲荷様で、お孫が何稲荷様じゃなどゝ
いふて、瓶を稲荷といふ神じゃと思ふてゐる人もある、

[illegible]の河内の[illegible]の狐[illegible]をオトウカサ[illegible]
[illegible]狐[illegible]を音(おん)でいふので、[illegible]
[illegible]も狐を狢(むじな)[illegible]
[illegible]のやうに、[illegible]
[illegible]狢(むじな)[illegible]
[illegible]狢(むじな)[illegible]
[illegible]狢(むじな)

宮さいはいに及ばずおしでも心ある人さ、古拾なるすを
中さぬるすを、説くなも及ばぬるすでムるが、狐の嘲しの
ついで
序は、子供品の為に、公法連ひのない拾は中して意
くのでムる、今一ツ序は中して意くてすがムる、よく世間
なんさい　たけ　ねこ　なげ　てけ　ねんさい　うら
に本書が妻の姫こそで才を拾て、妻が本書を然んで
くび　ちて　まつ　まつ
縊まことて、其当りの恐ろしさは、稲荷に祭ることなどを
いふすがあるが、弥はそしうらぬるすで、稲荷大明神が、
其拾なやむくしい明神でもムらぬ、以の神のうすで、

古拓なれば迷ひの人がまゝあるまた周り入ともすでムる、
尤世に切菓のある英雄などならむ、神にあらずしも
よいすでムるが、夫れ其人の名を其まゝに、神号に
してよ給いるまで、他の神号を復てつけて其
人の名も理かれて其絵もなく、又名を借りられる
神も迷惑なさるすでムる、加藤清正を其まゝに、
清正名と唱ふるなどは、諫によらしくムる、

○狐つかひといふものはあるまじきの理

世に狐つかひといふものがゐるが、まつたく狐を狭へもいふ様なちひさい狐で、大そう子の殖るものでとんと人の同じまゝ見えぬものじやあるまいよく世にはいふものじやが、元影を存する猩のもので、同じまゝあるものといふのあるものでもない、雲や雪や雲の様な微綱あるものでも、厚く重なれば同じまゝ見ゆる、後合亂れどもきよ、同じまゝ見えぬ理をあらすしじや、保しき同じまゝ見えぬが、其狐の術じやといふ、癖論家も

ある人が、何かちよつと言まなりしまつ事あらば、あるすがあると、
きやうじんなりとつけられて言まなりし、是をおよしぬと心が
頼信しして、殺狸あるのでも、狐をつけられたのでもなし
でもないのじや、新しいふてもいふ人のゆゑ人をそまや
あまりしきれる説じやなどいふ人もあらうが、其のでおれ
でない、説授が急変ある、其詳を、此狐つかひと人の
いふものが、東国まで浮山あるが、九郎四まで其のしを
ない、其代りに、九郎をだれ、犬神といふて、了変東国

の狐つかひと同じ様なるすがある、犬と狐と馬と連ひさう
なるすもなし、只そのかのいひ馬りやうで、悪しいるすを
いふものを、猟ぐな名をつけるものなるで、実は犬でも
狐でもないのじや、丈をまるまるく、実は狐もつけちる
ものとふは、字の毒なるすでムる、

○術といふは手練といふは等しき道理

術といふものを世間の人が心形連ひして居るゝ、馬
連ひうゝ、おのいふる様なんぞ連ひも出来るのじや、

世の人も、他郷と
ま
魔郷とて
がま
蔓草
の
陰隠
なる
所
きと
より
あま
天
の
しも
下、
ことごと
悉
く
ま
魔
の
ところ
所
で
だ
ある
ところ
所
が
ま
魔
の
ところ
所
で
だ
ある
ところ
所
の

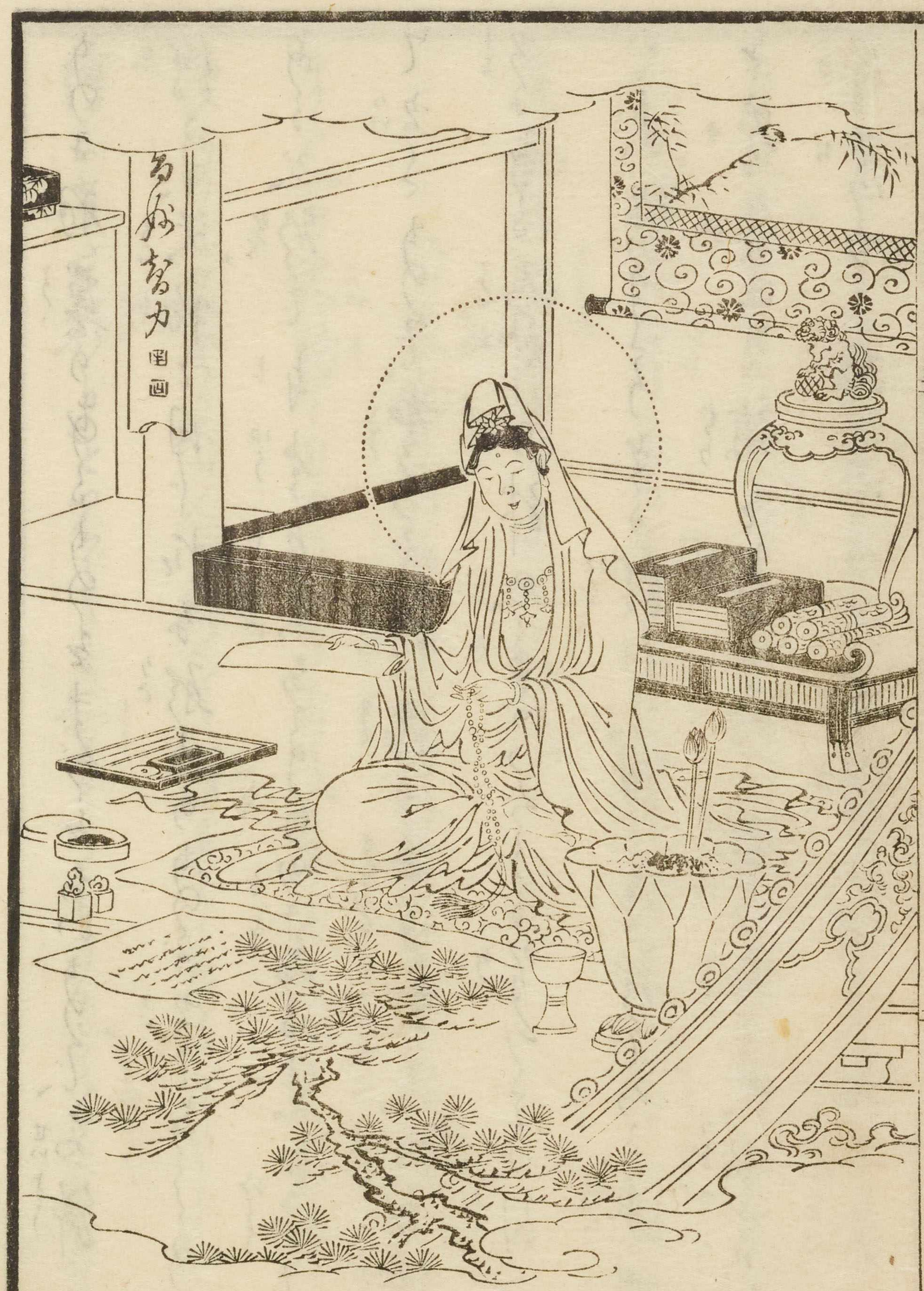
こまた外法術皆其業に熟練して、寄事に出来ぬ
妙しよ変を行えるのが術を行えるので、深秘の術など
も、身を離して早く隠れるすに妙を行えるをいふ
べきなるので、現身が消えなくなるのでさない、他術も、
ちゅうくかんぐんやうぐんぐんなどの実にあらはすなるべし、
つくのひの様なものでちょっと人の目をくらます術を
見えてたんで、魔術といふ所が同様なるすじや、
周ってるまは、予法人の様んで等くもので、

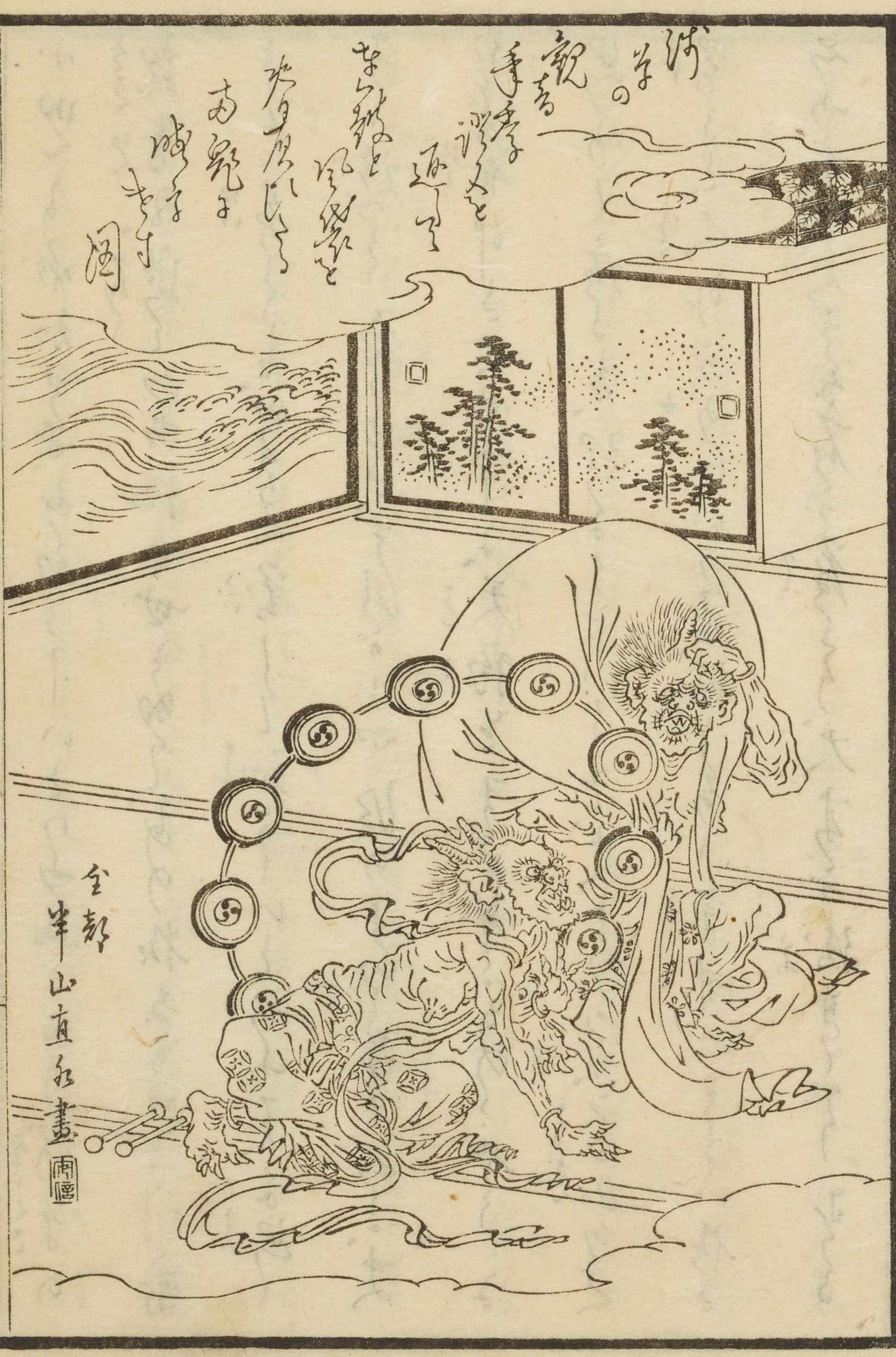
仙人(せんにん)あらば好(こうず)の家(か)の歴(あぐさ)ものに如て、傳(でん)なども
あり、画(ゑ)あらば、ゑ(ゑ)なども、狩(かり)して居る者に、ゑ理の事ならぬ
人を、縁に雲(くも)にも雲(の)にして居る者にしかるのでし、今(こんまち)は文明
異紀の婚(さまたげ)とかるるのでゐる、

○天狗(てんぐ)といふものをあるものにきらひ理

まだ一ツ天狗(てんぐ)といふものがある、是をとんと形(ぎ)らも
ないものでし、若ばかり人が喝(とな)へて懼(おそ)れて居るものしやが、
絵に出て形(ぎ)らを見てゐる知(しき)てゐるものでし、くまたのある

ものは羽翼のあるものをまづはないものじ、而洋の
繪も、天狗と同じ様な形らのものがかくてあらうのが
あるが、都て自然自生あるものの出来る意を表し
て出たもので、聖人ぞ、佛像の多く観者、或は佛
はまあるの天部の神の、多くのいくらも有つたり、同じ
いくらもかゝりまる都ひと、同じ理でムる、連鎖の
を脊原にて擦を持て居る雷の形らや、風鼓を
脊原にて居る風の神の繪を、今では三柔の




河
学の
観音
秉秀
謀文を
通ふる
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
全部
半山直和畫

小児ども
うるさく
訳もなく
まとわりつき、
おやじ
よく焼
おやじ
おやじ
おやじ

がないあり、青子がうハ宮も、おの狐つきと同じものと
ふるひてよいものでゝる、

○名物名物のふ思議を示すを不思議な非る道理
むかし名僧知識といふ程の人を、天狐といふものを
つかふことといふものよく人のいふものじやが、史を見人のきる
るすがなの行を合点のゆりめ、常代ありすがあるあり、狐でも
つかふのであふと思ふ、推量の考へうしてるので、史して
天狐といふものもないす、僧神通でを、山法あどの

世の中の人々の
ものも異形
○弥々悪く成行ぐ
異形
ばかりにて
人の
の形
ぐ
ぐ
ぐ

説をまゝに説まどをなまのみに学まれると、我が
勝手のよい所だけを取て、ますく異物を吐く様に
なりうとなりて、なんかなく存じやはなく、神と
いふものゝ道理のよくまゝる説を述べても、今日のもてし
の講義といふ事を、元来我が
ゆゑ国の神とは、此別もやうして勇り、絶非の
人の此狙ぐやに依て、学者せるのだなるめの道理で、
其神とは既に神代のやうに記してある勇り、国

付けまぐ、天地の魂（たまひ）といふべきものでし、則（あるいは）まゝが神で
ある、近（ちか）く之（それ）を強さんまた、現（ぐん）今（こん）人の体（さい）は魂（たまひ）がかりて、
同（しい）に見て心で知り、耳（しい）に聞て心で知る、手（てなし）は足（そうこう）と偏（そうこう）の
して我が欲（ねが）するまを為（さ）るも、皆魂（たまひ）のつぎゝ心るが、
梅（たまひ）を魂（たまひ）、どの様なものじやといふても、解（かな）らもなく
聲（れい）もないもので、霊（れい）のさきをするまで、見が
光（しん）則もやしく、真（しん）の不思議（ふしぎ）といふべきものでしる、
則（あるいは）神といふものもそうなものでし、上（ぎようこ）古の神の霊（れい）

が今もとゞまつてあるので、同ともいへぬ事もゆゑ
孫ぐ、靈妙のたゝまのあるものじや、掛き人の魂といふ
ものも、神の惠こそで為て魂じやに依て、神と同様な
靈妙を備へたものでゐる、人の体と小天地といふこと
天地と同一体といふこそでいふたものでをく體へて
いふぐ、樹木なんだ、神は根幹木で、人は枝葉じや、
樹木の根の地事を吸ふ深ひで、枝葉の繁る様に、
神の惠こそで人も生活して居るものじやに依て、其

手前勝手を好んで道を枉げ、人を悩ますやうな事をもまた仕出かすものである。世の中の事は自分の好きな事ばかりでは済まぬ。嫌いな事でも辛抱してやらねばならぬ。

自分の好きな道を歩むやうに、人にも好きな道を歩ませてやるのでなければ、人を束縛することになる。

自分の好きなものばかりを集めて、それで美術館だといやがるが、人を歓ばせるやうにするのが美術館の本意である。

人の家を訪ねるにも、その人の好きなものを携へて行くのが礼である。

茶を喫するにも、客の好きな菓子を出すやうにするのが善い。

自分の好きな事ばかりを人に強ひるのは、自分の好きな菓子ばかりを客に出すやうなものである。

人を教へるにも、その人の好きなやうに教へるのが善い。

人を使ふにも、その人の好きなやうに使ふのが善い。

人を使ふにも、その人の好きなやうに使ふのが善い。

人を使ふにも、その人の好きなやうに使ふ

我が一身の窺理から、現に今目に見耳に聞く和の
ものゝ、怪しい不思議なと思ふものの、物園を悉く窺
理して、夫から窺理書などを見ると、ならば
早い事、忽ち文明開化の境にも到らるゝ今日のものなし
なぞのいろはの様なものじや、扨今日も晩京になりました
なぞまづ見ようでいらしまして、此次の六の日まで、今開化
文明の境に到る者の学問の仕方、国学、漢学
西洋学の論、又今日説きましたうちに、明をなれば

必幸福を招き又は逆ふ人を必災害を受るとのみやし
まして善人でも不幸まして災害を受け悪人でも幸ひ
まして災害をまぬかるゝ様なりもある、其所理を説き
殆しまして其ものゝ人の悪臭悪臭などいふものが、
あるものゝ如いものゝ深なども説きましようは徴く、又
早朝より御出席なさるがよ給しうゐる、

文明兵紀初編巻第一

新發兌書籍畧目錄

人阪心齋橋通北久太郎町
柳原喜兵衛藏版

世界の大畧

荻田筱夫先生著　全二冊

此書ハ五洲の形勢を論ド各國の名号ハ勿論方面の廣狹人頌の多少首府都城交易場等を擧げて全世界を觀る事掌を照すが如く且章句ハ國風の長歌に擬し書ハ菱湖流の大字にして兒童必讀小學校緊要の珍本なり

童蒙筆ばかひ

荻田筱夫先生著　全一冊

二編追刻

運筆書法の書なりといへども高妙にして通曉に難きもの少ならず依て菱湖先生の家則に從ひ永字八法三十二勢及び顧眄向背仰覆の揮運に至るまでの秘訣を載せ懇に俗解

を加へられたれバ一讀の下直ちに其規矩に構ふべき至寶の書なり

皇國綜覽

荻田筱夫先生著　全一冊

此書府縣の管轄を分ち官幣國幣の神社各國の郡名石高人員礦山の所在所産の物品等悉く記載せる物にて上官路に在るの士より下農工商に至るまで須臾も欠くべからざるの善本といふ可し

地方大概集

加藤高文先生著　從初編至四編各編五冊

此書ハ古今地方の定法一事も洩さず抄錄し且取斗らひ方と詳にしたれバ其筋の君子座右一日も欠く可からず郡村の事務必用の書なり

小學必用單語五千字

荻田筱夫先生書

全三冊

此書ハ單語數千字を楷行二体に書したまハ獨童蒙習讀の用のみならず天文地理百科の飜譯書を觀るの扶けを為す事少しとせず飜譯書字引と題するも當らずと謂ふ可からざるものなり

團欒夜話

荻田筱夫先生述

画入全二冊

此書ハ天地間の眞理により方今御政体の有り難き事ハ申に及バず文學技藝商法農事に至るまで研究せざるべからざるの講釈を詳にしたれバ如何ゝど舊習固陋の人も一朝開化に進歩し昨日の面目今日に變ド自主自由の正權を執り富強立どころに成るの跡書なり

銀行規略

加藤祐一先生編述
荻田長三先生書　全二冊

此書ハ商社を結ぶの主意よりしてバンクの規則等を銀行條例の趣によつて手本文に綴り商家幼童の為めに備へたる書なり

文明開化

加藤祐一先生編述
初編　全二冊

此書ハ斬髪洋服の事より敬神愛國の正理を説き文明開化の大趣意を講釈したる書にて開化にはいろさせ人ハ必讀まざる事を得ざる書なり

養蠶事實

佐貝義胤先生口授
加藤祐一先生補綴　全三冊

附　利益大概

此書ハ蠶生ひ立ちの始めより繭となるり絲を製するに至る迄の扱ひ方桑苗の見分け培養の手續き等婦女子にも見易きやう仮名書きにして養蚕家實用の書なり

増補 大日本船路細見記

加藤祐一先生著　全一冊

明治六新増再刻

此書ハ海路の淺深暗礁の有無等實地に就て研究したる航海家の説を輯録せし書にて蒸氣風帆の船持ちたる人常に掌上に安して少時もさしおく可からざるの書なり

商社往來

加藤祐一先生著　全二冊

此書ハ商社取建て約定書の大概社中賞罰の規則外國人雇入その手續き願面の大意其外種々の取扱ひ方等先生の學識を以て贈答の書簡にものされたれバ商社を結ぶ為の手

本に供ふる至宝の書なり

五十韻の原由

加藤祐一先生著
村田海石先生書　全二冊

附横文字五十韻

此書ハ手習ひ本にて初めに五十韻を大書し次に五十韻の活用を示し國語の正しき筋を説き今人々の常に言ふ詞といへども聊も規則に洩るにとなき妙用の訣を言短に俗の手本文の如く綴りて學問ハ先我國のとよりして學ぶ可き道理を教へたる書にていろはに代て幼童必習ひたなゆ可き書なり

會社辨講釋

加藤祐一先生口授
積玉圃主人聽記　全二冊

此書ハ諸商社諸機械製造の商社バンク貸附會社等の取建

方願立の手續き取扱の定法利益の大概等西洋各國の制限方法によつて向きに刊行せられし會社辨の講釋にて加藤先生の説かれたるまゝに俗談平話を以て筆記したるものなれば兒童といへども讀易く會社のことをこゝろうるは此書に勝る書はなし

交易心得草

加藤祐一先生著

前編 一冊
後編 二冊

此書は交易通商の道乃世に欠き難き道理よりして費を省き便利を計るは分業の法によるべき訳外國人と取引の心得商社を建てバンクを建つる規則危嶮請負の割合等凡商法にたづさせる事悉く輯録して家を富ますは國を富ますの基本たる事を懇に説き示し當時の實用を專にしたる書なれば商家のならず讀で賣買互市の扶けと為す可きなり

方向針筋

廻船用心記　吉村海洲先生著　全一冊

廻船必携

大日本海路圖　順風丸大吉大人著　折本　全二帖

水路海程の上に在り最著意すべきハ一の盤針なり針向一たび失ふ時ハ託する所を知らず此圖ハ洋中の目的諸國の山巒港口の所在海灣地峽島嶼岬埼又錠泊の便否等までを摸寫したるものにして船路細見記と併觀航海安穩を得るの至大の奇圖と謂ふ可き重寶なり

海外行程記　大戸陶菴先生著　近刻　全一冊

鵬遊文章　荻田筱夫先生著　近刻　全二冊

東京　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同

須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小林新兵衛
和泉屋市兵衛
和泉屋吉兵衛
岡田屋嘉七
萬屋忠藏
山城屋政吉
出雲寺萬次郎
和泉屋金右衛門
須原屋伊八

東京　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同

鳩金屋清吉
京都村上出店
鈴木喜右衛門
椀屋喜兵衛
大坂屋藤助
袋屋龜次郎
近江屋岩次郎
若林喜兵衛
長門屋龜七
河内屋文助

西京　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同

菱屋孫兵衛
吉野屋仁兵衛
吉野屋甚助
錢屋總四郎
田中屋治兵衛
著屋宗八
勝村治右衛門
塚屋仁兵衛
塚屋九兵衛
出雲寺文治郎
田中屋專助
須原屋平左衛門
村上勘兵衛

駿州靜岡　本屋市藏
遠州濱松　伊勢屋太右衛門
勢州津　山形屋傳右衛門
同　篠田伊十郎
同　山田屋嘉助
同　松坂　本屋傳四郎
美濃大垣　本糀屋宗治郎
江川大津　本屋利兵衛
三州岡崎　加藤利兵衛
甲州府中　內藤傳右衛門
越前福井　岡崎佐喜助
同　二文字屋安兵衛

同　永田調兵衛
同　石田忠兵衛
同　丁子屋源次郎
同　北村四郎兵衛
尾州名古屋　永樂屋東四郎
同　菱屋藤兵衛
同　菱屋平兵衛
同　萬屋東平
同　美濃屋伊六
同　美濃屋文治郎
同　文教堂保兵衛
同　美濃屋代助
同　永樂屋正兵衛

越前敦賀　本郷善七
加州金澤　近岡屋太兵衛
佐州羽茂　山本屋與八郎
紀州日高　紀小竹屋佐兵衛
同　菱屋藤次郎
同　若山　坂本屋大二郎
南都　油屋儀八
同　後藤輯
和州三輪　兵庫屋又四郎
伯州倉吉　山本屋弥一郎
播州姫路　灰屋輔二
同　灰屋長平
同　灰屋庄八

阿州德島　天滿屋武兵衛
同　紀伊國屋三右衛門
讃州金比羅　柏屋仲助
同　寶屋小七郎
豫州今治　島生屋廣助
同　吉田　岩城半三郎
同　宇和島　山本彦八
備前岡山　勢能屋源十郎
備中倉敷　林　源米藏
同　井原　荻田元治郎
同　高梁　加島屋保之助
同　玉島　大村屋文藏
備後福山　箔屋喜兵衛

藝州廣嶋　田邊屋眞六
同　井筒屋勝次郎
長州下之關　書籍會社
防州山口　山城屋彦八
同德山　淺田屋孫兵衛
薩州鹿兒島　萬福屋要藏
泉州堺　青木泰助
同　河内屋久三郎
大坂安土町　書林會社
同本町　書籍會社

明治六酉年四月官許
同　九月發兌

著述　加藤祐一

藤遜家藏版

弘通書肆　大坂心齋橋通北久太郎町
積玉圖　柳原喜兵衛

1002378089